

『万葉集』へのいざない

青山学院大学文学部日本文学科

小松靖彦

1. 新元号「令和」と『万葉集』

1-1 「梅花の歌三十二首并せて序」

天平二年正月十三日に、
帥(そち)の老(おきな)の宅(い)
こに萃(あこ)まりて、宴会
を申(ひらく)。

時に、初春の令月にして、
気淑(よ)く風和(やはら)ぎ、
梅は鏡前の粉(こ)を披(ひ)
らき、蘭は珮後(はいご)の
香(かう)を薰(かをら)す。

(訳) 天平二年(七二〇)正月十三
日に大宰府の長官(大伴旅人)宅に
集まって宴会を開く。

時あたかも春の初め佳き月で、気候
は清らかで美しく風は穏やかである。
梅は女性の鏡の前の白粉(おしろ
い)のように白く咲き、蘭草(へよい
香りのする草)は腰に下げる匂袋
(においぶくろ)のように香ってい
る。

1-2 「梅花の歌三十二首併せて序」の原文

天平二年正月十三日、萃于帥老
之宅、申宴会。

于時、

初春**令和**、

氣淑風**和**。

梅披鏡前之粉、…（視覚）

蘭薰珮後之香。…（嗅覚）

■ 四六駢儷文

■ 序は、春の美しさを称え、その自然の中で一同が満ち足りていることを述べる

■ 「令」|| 「月」を褒める語

■ 「和」|| 穏やか

↓ 「令和」|| 〈佳き穏やかさ〉

a fair gentleness

1-3 梅花の宴の目的

- 中国の漢詩の宴
 - 王羲之の「蘭亭の会」（352年）
——空しい日々を生きてゆく痛ましさ / 自然の中を生きる喜び
 - 妻、多くの知友を喪った旅人の悲しみ
 - 「礼節の花」である梅による心の癒し
← 「万葉集と花」（参考資料）の大伴旅人と山上憶良の歌
- ◎「令和」は、平穩への祈り

2. 『万葉集』とは何か

2-1 『万葉集』の魅力

- 現存する日本最古の歌集『萬葉集』
- 7世紀後半から8世紀前半の「やまと歌」

【その特徴】

(1) 聴き手を前にして声に出して読み上げる歌

——集団の心に根ざして、“集団の記憶”を伝える

(2) 美や知性の表現として磨き上げられた、〈書きことば〉による詩

——ことばの美の探究、ことばによる人間探究

2-2 例えば…

玉津島 磯の浦廻(み)の

砂(まなご)にも

にほひて行かな

妹(いも)も触れけむ

(巻九・一七九九)

(訳) 玉津島へ和歌山市和歌浦
にあった島への磯の細かい砂に
触れ、その白い色に染まってゆ
こう。妻も触れたことであろう
から。

2-3 『万葉集』原本

- 『万葉集』の最も古い写本は「桂本」（平安中期、11世紀写半ば）
= 『万葉集』の成立は8世紀末、つまり約250年後
- 『万葉集』の原本は現存しない
- しかし、『万葉集』の原本を復元する手がかりはある
——イギリスに……！？

2-4 7、8世紀の 中国文化圏の正式な「書物」の姿

【大英図書館所蔵スタイン・コレクションの「敦煌写本」】

- ① 卷子本
- ② 縦約27cmの麻紙を用いる
- ③ 専門の写経生が書写する
- ④ 楷書を用いる
- ⑤ 1行17文字
- ⑥ 縦と横の罫線を引く

2-5 『万葉集』原本の姿

萬葉集卷第一	雜歌	泊瀬朝倉宮御宇天皇代 <small>大泊瀬權武天皇</small>	天皇御製歌	籠毛與美籠母乳布久思毛與美夫君志 持此岳尔菜採須兒家告閑名告紗根虛 見津山跡乃國者押奈戸手吾許曾居師 吉名倍手吾己曾座我許背齒告目家呼	毛名雄母	高市岡本宮御宇天皇代 <small>高長足日廣額天皇</small>	天皇登香具山望國之時御製歌	山常庭村山有等取與呂布天乃香具山 騰立國見乎為者國原波煙立龍海原波 加萬目立多都怜何國曾靖嶋八間跡能	國者	天皇遊獵内野之時中皇命使聞人連老	獻歌	八隅知之我大王乃朝庭取撫賜夕庭伊 緣立之御執乃梓弓之奈加弭乃音為奈 利朝獨尔今立須良思暮獵尔今他田渚 良之御執梓能弓之奈加弭乃音為奈里	反歌	玉剋春内乃大野尔馬數而朝布麻須等	六其草深野	幸讚岐國安益郡之時軍王見山作歌	霞立長春日乃晚家流和豆肝之良受村 肝乃心乎痛見奴婁子鳥卜歎居者珠手 次懸乃宜久遠神吾大王乃行幸能山越 風乃獨座吾衣手尔朝夕尔還比奴礼婆 大夫登念有我母草枕客尔之有者思遣 鶴寸乎白土網能浦之海處女等之燒塩 乃念曾所燒吾下情	反歌	山越乃風乎時自見寐夜不落家在妹乎 懸而小竹櫃	右檢日本書紀無幸於讚岐國亦軍王 未詳也但山上憶良大夫類聚歌林曰 記曰天皇十一年己亥冬十二月己巳 朔壬午幸于伊豫温湯宮云々一書是
--------	----	-----------------------------------	-------	--	------	------------------------------------	---------------	--	----	------------------	----	--	----	------------------	-------	-----------------	--	----	---------------------------	--

• 漢字だけで書かれていた『万葉集』

◎画期的な「書物」『万葉集』

書物学、書誌学

3. 読み継がれた『万葉集』

3-1 1200年の歴史

・平安時代から現代まで読み継がれて来た『万葉集』

① **書写した人々**（容易ではなかった全20巻約4500首の書写）

——藤原伊房：『万葉集』巻9の書写に4日

（比較）三條西実隆：『古今和歌集』20巻約1100首の書写に6日

② **訓読した人々**（漢字で書かれた『万葉集』を「ひらがな」に）

——現代でも訓読できない歌：13首（主要なもの）

③ **自分の作品に『万葉集』を利用した人々**（紫式部、藤原定家ら）

④ **愛読した人々**

3-2 西本願本万葉集



西本願寺本の複製

- 20巻が揃った最古の写本
- 鎌倉時代後期、13世紀末から14世紀初頭の書写
- 東国出身の学僧仙覚による研究の成果
- 現代の『万葉集』のテキストの底本
- 石川武美記念図書館蔵

3-3 戦場に携行された『万葉集』

文庫本万葉集一卷 (まき)

背囊 (はいなう) に

ふかく蔵 (をき) めて

いでたつわれは

松岡茂夫

(華中・旧満洲国北部出征時)

〔出典〕柳田新太郎編『大東亞戦争歌集将兵篇』天理時報社、一九四三

今日よりは

顧 (かへり) みなくて

大君の

醜 (しこ) の御楯 (みたて) と

出で立つ我は

火長・今奉部与曾布

(万葉集卷二十・四三七三) 〈防人歌〉

(訳) 今日からは後ろを振り返ることをせず、大君の至らぬ御楯として出発するのだ。

3-4 強制された死の受容のために

- 日中戦争・太平洋戦争を進める政府と軍は、『万葉集』を、天皇への忠義心を養い、戦意を高揚するための道具として利用
- 「第二御楯隊」（一九四五年二月に硫黄島に出撃した神風特別攻撃隊名）
- 兵士や民間人は、強制された死を価値づけるものとして『万葉集』を受容

水口文乃『知覧からの手紙』（新潮文庫）

大君の醜の御楯と

散りゆかん

浮世はなれて

きよきみ空に

第二御楯隊・K上飛曹長

四五年二月二十三日付）
「出典」 「朝日新聞」 「読売新聞」 一九

3-5 未来の『万葉集』

□「日本のあらゆる詩歌の中で『万葉集』は一番西洋人を感動させるはずであって、英訳で読んでもそれ以後の日本の歌にない説得力を有している。『万葉集』に出ているテーマ（妻や子の死、初恋、貧困な生活の苦しみ、いくさへ行く兵士の感情等々）は普遍的なものばかりであって、詩に興味をもっているのに『万葉集』に興味を持たないような人は想像が出来ない。」

（ドナルド・キーン「海外の万葉集」『著作集』第1巻、新潮社、2011）

◎「**「エスニシティ」（民族性）や「ネイション」を大切にしながら、それを絶対化せずに、人類の普遍的な文学として『万葉集』を読んでゆく**

◎『万葉集』を通じて、世界の文学や文学に貢献する

『万葉集』へのいざない

おわり